

岡山県近世社寺建築の調査

建築物研究室

文化庁では昭和40年より継続的におこなってきた国庫補助金による民家緊急調査のあとをうけて、今年度より新たに近世社寺建築の調査をはじめた。初年度として栃木県・千葉県・岡山県が調査地に選ばれ、当研究所は岡山県を担当した。事業主体は岡山県教育委員会である。

調査は、予備調査、一次調査、二次調査の3段階にわけ、予備調査を県下各市町村教育委員会に依頼し、それに基づいて調査対象を選び、以後を調査員が実査するという方法をとった。

当初の予測通り、予備調査で3000近くの棟数があり、そこから調査件数を選び出すのはかなりの厳選を余儀なくされた。また調査予定に入れていながら日程の都合上割愛したものも多い。したがって今回調査しなかったものの中にも当然一・二次調査の対象となるものもあり得るが、それらは今回未調査におわたった市町村と合わせて再調査の機会に期待したい。

以下今回の調査の概要をのべる。

調査件数 県下78市町村の内予備調査は65、一・二次調査は54を数えた。未調査地が県北に多く、また岡山市・倉敷市など近年の合併で広大な地域を占める市町村は調査が希薄となった感はあるが、それでも調査件数は右表に示す数にのぼり、ほぼ県下の大要は知り得たものと思われる。

	寺 院		神 社		計	
	件数	棟数	件数	棟数	件数	棟数
予備調査	583	1,538	542	1,450	1,125	2,988
一次調査	158	485	165	351	323	836
二次調査		97		93		190

調 査 件 数 表

建立年代 一次調査をおこなった836棟を年代別にわけると、17世紀以前1.4%、17世紀15.3%、18世紀43.2%、19世紀40.1%となる。もっとも18世紀末以降の建物については棟札などによって年代が明確であるとか、または何らかの特徴があるとかに限ったため、現存する実数とは関係はない。この内、1650年(慶安)以前の建物は寺院18棟・神社10棟である。このほかすでに重要文化財として国の指定を受けている社寺建築(木造に限る)は、鎌倉1棟、室町18棟、桃山3棟、江戸6棟あり、江戸の6棟は1750年以降の総社本殿と閑谷神社々殿とであるから、それらを除く22棟に上記今回調査の28棟を加えた数が県下の17世紀前半以前の社寺建築の遺存総数として把握できる。これ以降になると数は俄然増加する。17世紀後半50年間の建物が112棟にのぼるのをみても理解できよう。

寺院建築 中世末以降、社寺建築の様式的な区分はさほど明確でなくなり、おおむね和様を基調とし、それに禅宗様の細部が加わる一般的傾向は岡山県の場合も例外ではない。しかし個々についてみるとそこにはかなりの濃淡があり、宗派によってもそれぞれ差があることが分る。例えば、中世以前の草創と伝えられる天台・真言の寺院では内外陣を区画し、外陣に大虹梁を架けて入側一間通りを化粧屋根裏とするなど、中世の密教仏堂の伝統を伝えるものも多い。五

間堂では安住院本堂（岡山市・慶長6）をはじめ福生寺本堂（備前市・天和2）、蓮台寺本堂（倉敷市・享保5）などがあり、小規模な三間堂でも仏壇を背面に突出させこの制をとるものが多い。

一方、池田藩の曹源寺（岡山市）、津山藩の本源寺（津山市）等藩主の菩提寺となった寺院はすべて臨済・曹洞の禅宗寺院で、その建物も禅宗様が基調となる。特に曹源寺は元禄年中に草創された寺院であるが、伽藍配置も正規の規格にのっとっている。また宝福寺仏殿（総社市・寛延2年）のように単体として禅宗様の古様を持った建物もある。法華宗系はかつて備前法華の名で呼ばれていたように一時隆盛をきわめ、遺構としても妙本寺本堂（賀陽町・天正）や本経寺本堂（柵原町・元和4）、本成寺堂（和気町・寛永11）、妙法寺本堂（津山市・承応2）など近世初頭のものがまとまって残っているのは本県の特徴の一つといえよう。

神社本殿 国指定の本殿6棟のうち流造は1棟も含まれていない（法華宗系の鎮守社で3棟あるが）。したがって室町中期以降いろいろな形式の本殿が混在していたことがわかるが、17世紀前半以前の本殿では7棟のうち6棟までが流造で占められ、少なくとも近世初期においては流造が主流であったことが知られる。

しかし、それ以降になると様相が変化し、流造のほかに入母屋造妻入向拝付きの社殿や入母屋造平入社殿がふえてくる。このうち妻入社殿は中山神社本殿（津山市・永禄2・国指定）にすでにみられ、地元では神社名をとって中山造と称している。この形式には2種類あり、一つは三間社ないしは大型一間社の本殿にもちいられる形で、中山神社にみるように正背面とも入母屋造にして軒をまわし、その正面に唐破風造の向拝を付したもので、いま一つは一間社に多く、正面入母屋造・背面切妻造として正面側に縫破風（軒唐破風にするときもある）をとりつけたものである。后者は前者の簡略化した形とみうけられるが、在来分類からいえば隅木入春日造の中に含まれよう。この形式が分布する地域は比較的明瞭で、津山市を中心とした旧美作国とそのわずかな周辺とに限られる。

これに対し入母屋造平入社殿は、流造と共存する地域で備前・備中がこれに入る。いずれの場合も総体的にみて年代を追って彫刻類を多用する傾向にあり、幕末期でそれが最高潮に達する。また、流造のように切妻であっても斗拱を出組あるいは二手先でまわすのがふえてくるから、当然妻部分はより一層賑やかになり、それ以前のものとは明らかに区別できる。

境内建物 寺院では門・鐘楼・経蔵・塔・太子堂、阿弥陀堂などの付属堂・庫裏・客殿などで、神社では隨身門・拝殿・幣殿・摂末社・社務所などいずれも多数の建物によって境内が構成されていることはいうまでもない。近世社寺を考える場合、個々の建物はもちろんのこと、一つの建築群としての観点からもみる必要がある。古い由緒をもつ山岳寺院の金山寺（岡山市）や本山寺（柵原町）、19世紀始めではあるが建物がすべて同一時期で揃っている福田神社（八束村）など一例にすぎないがそれぞれの個性を感じさせるに充分である。

以上のほか、現存する建物と直接関連ある棟札170枚を発見し、各社寺の建立事情や、大工集団の発生とその嫁動範囲がわかったなど、今回の調査で得たものは大きい。（細見 啓三）